アフリカ自然保護活動における保護思想のあり方

日本の国際貢献に向けての私見

岡安直比

2年前の春，じっくり腰を落ちつけて大型類人猿の行動学的調査に取り組むべくコンゴ共和国に出発したつもりが，衆知のようなアフリカへ押し寄せる政治的変転の波にのまれ，大統領と反体制派のいつ果てるともない咬みつき合いで銃弾の飛び交う首都ブラザヴィルを離れ，イギリスに暮らす身となってしまった。本誌第18号の武内進一の報告にあるように，「つくられた」はずの抗争がエスカレートし，反体制派の拠点と中心街との境界に位置していたわが家は，大統領派の戦車につぶされて跡形もなくなってしまったという噂である。ただし現在は，今年2月に発表された国際司法団の裁定を与野党とも受け入れたおかげで事態は好転し，和解も成立して今年初めの紛争が嘘のように落ちついているらしい。

1　フィールドにおける自然保護活動との関わり

私自身は霊長類の社会生態学・行動学的研究を専門としているが，昔から手つかずの自然に対する憧れが強く，勢い調査地も自然林を残した山中やジャングルの生い茂る熱帯アフリカを選ぶこととなった。そしてこのような地域で長期継続調査を行なうためには，いかに自分の対象動物とその生活空間である森の存続を，周辺住民の生業活動等がもたらす影響と折り合わせていくかという自然保護の問題を避けて通ることができない。

具体的には，ザイール共和国赤道州，コンゴ共和国サンガ州，そして同じコンゴ共和国の首都ブラザヴィルのゴリラ孤児院などで，行動学的調査と並行して森林生態系に関する各種自然保護活動に関わり，アメリカ・ヨーロッパ等のNGOとの意見交換を行なってきた。特にコンゴ共和国は，コンゴ盆地に広がる世界有数の熱帯多雨林を多く国土に含み，同様の自然条件を揃えた近隣諸国の中央に位置することから，中部アフリカ数カ国にまたがる自然保護プロジェクトの良い拠点となっており，コンゴ共和国森林省との協力のもとに活発な活動が繰り広げられている。

このような自然保護活動は，われわれ研究者にとって生態学的知識を生かす良いチャンスであるが，具体的な施策に対する助言を行なう際は，保護と開発のバランスへの慎重な配慮を示すことが重要になる。相手国の対応者にしっかりした将来的展望を持って活動している人物がいれば別であろうが，この点に関しては，同じ目的で活動して

いるはずの先進国のNGOの間にも思想的ギャップが存在し，保護活動に確執を生むもととなっている。人間の居住区で森林保護を推進するには，住民自ら自然との共存関係を確立していく内からの意識改革が最も重要であり，保護一辺倒の対策では不十分だと思うが，このあたりは，同じプロジェクトで働く研究者とマネージャーの間でさえも，合意形成が難航したりする。そこで本稿では，中部アフリカ熱帯林における自然保護活動の動態とその思想的背景について考察してみたい。

2　政治化する環境保護概念

環境保護思想が希求するのは，地球の自浄作用を越えた破壊を防ぐことである。生物学の歴史の中に「生態系」という生物の種間関係のバランスを重視した観点が生まれ，生態学が一世を風靡すると，これで地球は救われる，生物の相互作用を理解し自然環境に対する人間活動を制限すれば，地球環境を適正に保てる，といった楽観的な管理主義も登場したが，実践面に関してこの見通しが甘すぎたことは今や自明である。

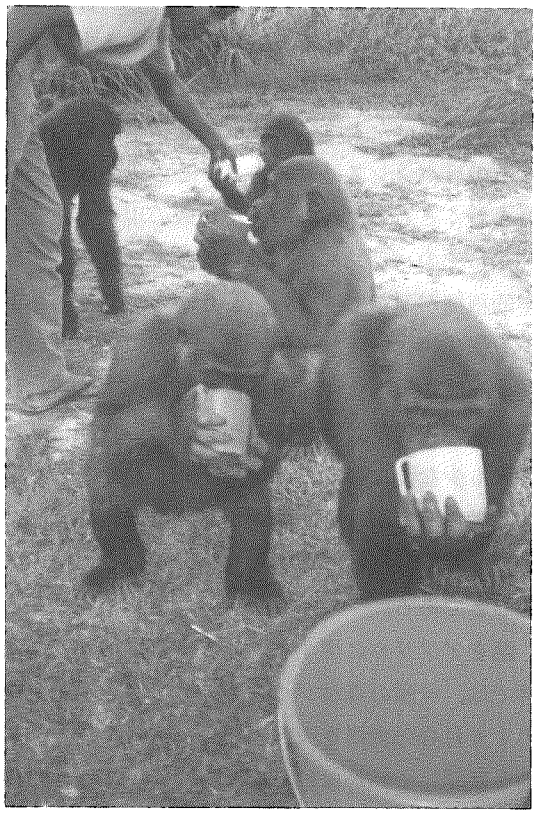
ひとつは基礎研究上の行き詰まりである。一筋縄ではいかない複雑な生態系の絡みに，各々の種がもつ環境に対するインパクトを把握しきれないのである。生物界の多様性は人類の手に余り，生態系を管理するという発想は見事に打ち砕かれた。「ニッチ」(生態的地位)という概念から導かれるバランス感覚は，人間すらそこから免れ得ない点で自分本位に走りがちな現代人に警告を与え，急速な自然破壊を見直させる良いきっかけとなったが，まだ具体的な応用には遠いといわざるを得ない。

にもかかわらず，地球環境は人間活動によって加速度的に疲弊し，解決せねばならない問題は山積している。大は湾岸戦争時の原油大量流出から，東京のヒート・アイランド現象まで数え上げればきりがない。ここに2番目の問題が登場する。

すでに述べたように環境問題を扱う際に問題となるのはバランス感覚であり，その攻めぎあいが行き着くところが各国の環境行政の現状である。しかしそのバランスには絶対的基準になりうる科学的根拠が呈示できない。したがって個々の事例を生態学的に解釈し施策を勘案する際に，環境問題は高度に政治化する可能性をはらんでいる。利潤追求が先走り，取り返しがつかない状態に至ることも少なくない。ここに歯止めをかけるのが保護運動であるが，理想論をかざして保護の極端に走っても解決にはつながらないのが，この問題の難しさである。

話をアフリカに戻すと，たとえば中部熱帯多雨林では，一頭の森林ゾウの生存とピグミー1家族の1カ月分の食料を天秤にかけながら自然保護活動を展開していかなければならない。みなさんはどう対処されるだろうか。木材伐採会社の幹部なら，貴重な労働力であるピグミーに軍配をあげ，動物学者はゾウを守ろうと躍起になる。人をとるかゾウをとるかという極端な議論にならなくても，ゾウ半頭分でピグミーに我慢してもらい，人と自然双方の埋め合わせができればよいが，この割合一つとっても議論百出である。さらに森林生態はピグミーとゾウの関係で終わるはずがなく，生物の教科書によく登場する，生物ピラミッドの階層関係で理解できるものでもない(あの乾燥地帯のモデルに比べ，多様性の幅は格段にひろがる)。

熱帯多雨林の複雑な生物相は，地域住民の生活から資源開発を目的とした先進国の大型プロジェクトまでさまざまなレベルの人為が加わることによって，ますます先が見通せないものになる。この状況では根本問題がどこにあるのかはきわめて



朝，森の散歩の前に，ミルクをもらう孤児たち
（ブラザヴィル動物園のゴリラの孤児リハビリテーションセンターで）

曖昧になり，思想的合意が得られるか否かが保護推進の鍵を握ることになる。

3　地域住民不在の自然保護

近年，開発と環境保護のバランスについて開発促進側からの歩み寄りが見られ，保護推進派との協力によって新たなプロジェクトが組まれ始めたことは大きな前進である。これに伴い国連，世界銀行，あるいはEU等による開発援助計画が目白押しのコンゴでは，「地球にやさしい」自然保護に即した国立公園の整備・充実と観光開発は援助を呼び込む目玉商品の一つとなり，自然保護NGOの活動は広く奨励されている。

ところがこのような大型プロジェクトが進み始めた結果，自然保護活動も国家的政治メカニズムに左右されるようになった。また現場における経済力の圧倒的不均衡が生まれ，先進国NGOが運営する自然保護活動も，一歩間違えば，援助に名を借りた金による植民地支配と陰口をたたかれかねない状況になりつつある。これでは世銀の経済政策の二の舞である。

しかし，自然保護計画を開発経済政策と同列に扱うことはできない。なぜなら，実際に政策が展開されるのは，都市から離れた貨幣経済に縁の遠い地方であり，森や動物と身近に生活し彼らを守ることを要求されるのは，政治から最も遠い地方生活者だからである。しかも問題になるのは，森林生態系をいかに「現状維持」するかという目に見えにくいバランスである。地図に線引きした国立公園を見せ，これこれの法律が成立し施行されることになったと役人が宣言し，違反者を取り締まっていくだけでは終わらない。

これら地方の人々の生活は自然への依存度が高く，基本的に共存関係が成立している場合が多い。熱帯林に大きなダメージを与えるのは，むしろ伐採会社や外部から進入してくる密猟者であるが，法律はこの区別をつけられず，地域住民に犠牲を強いる場面は避けられなくなる。かといって，経済力をバックにむやみに雇用を生み出し現金を与えても貨幣経済の浸透していない小さな村では，生活物資の供給が貨幣供給に追いつかず，いたずらに物価がつり上がるばかりで生活を混乱させる。その反動が森林破壊や密猟に結びつくことすら考えられるのである。このバランスをとり，自発的な保護思想を培う住民主体の対策を練るには，人類学，あるいは経済学的視点を取り入れる

ことも有効であるが，残念ながら，このような総合的アプローチを同時進行させているプロジェクトは見あたらない。しかし，自然保護を定着させ，自活に結びつく政策として国立公園の充実や観光開発を行なう地盤を固めていくには，地域住民の啓蒙が必須である。自然保護運動は人々の身近で，人々の視線のレベルで分かりやすく，焦らずたゆまず行なわれなければ効果は期待できない。

ところが大型化した自然保護活動は，国連のPKO活動がアフリカ各国で行なっているかなり強硬とも思える内乱調停策とその破綻と同じ問題を顕在化させ始めている。早く効果をあげようと焦ってアメとムチを次々と繰り出し，アフリカ流の交渉術を無視した強硬策に走る姿は，南アフリカ選挙をめぐってインカタ自由党党首ブテレジが硬直した態度を取ったことで招かれた内戦の危機の中で，懐柔策を受け持ったキッシンジャーの態度を彷彿とさせる。これでは，先進社会が持ちこんだ「自然保護」の概念が結局は上からの押しつけになってしまい，人々の間に定着していくのか疑わしい。

アフリカの政治的混乱を一見すると，地場産業が確立しておらず，世銀や先進諸国のODAの援助政策に頼る結果，富が権力に集中し政治不安をひきおこすという経過をたどることが多い。コンゴがこのような轍を踏まないためにも，国家規模のプロジェクトとなった自然保護活動は，将来的な自立を目指し，環境教育その他の多角的な政策を平行して取り上げていく必要がある。

4 草原の民の自然観と多様性に対する認識の差

以上のような議論を，コンゴで知り合った欧米の自然保護関係者とたびたび繰り返したのであるが，その中で強く感じたのは，キリスト教思想を根底に持つ自然に対する支配意識が招くアンバランスである。前述した生物ピラミッドの頂点に立つのが神であり，2段目が人類という構図が彼らの間に潜在しているように思えた。すでに1段目は不在かも知れぬが，いずれにしても人類は生物界の頂点に立ち，他の生物を管理し，守ってやる立場なのだというわけである。筆者が「われわれ人間も生物の一員なのだから（良い意味でも悪い意味でも特別扱いはおかしい）」という表現を使うと「日本人はそういう考え方に慣れている」と言われ，「地域住民の主体性を無視した押しつけでは自立には結びつかない」と言えば「（資源である）森への侵入を野放しにはできない」と反論される。彼我の心情的な自然観の違いを実感した。

イギリスに居を移してはじめてこの心情を理解できた部分もあるが，この発想は，人為に余る天変地異もほとんど起こらず，生物の多様性も小さい上に，技術革新による工業化で平らな国土の隅々まで人手が入ったヨーロッパ社会だから生きながらえたものの，この環境下で自然と「折り合いをつける」保護思想が育ち得るだろうかという疑問が浮かぶ。一方相手は世界中でもっとも豊富に生き物が育ち，人間から動植物から寄生虫から病原菌あくたが雑居し，複雑に絡み合って生きている赤道直下の熱帯多雨林である。少し考えてもバランス感覚のギャップは相当のもののように思われる。

5 日本人のバランス感覚
ユニークな立地条件と培われた「共存意識」

この点，日本人は現在ギャップを埋める最短距離にいるというのが私の強調したい結論である。日本の自然環境は地震や台風や天変地異が多く，山がちの地形は人間が克服できるレベルを越えており，伝統的にわれわれは自然と対峙するより和

をなすよう心がけてきた。また，人里近くに森が残りサルやシカなどの大型動物が身近に生息する環境は，日本人の中に自然と「共存する」という感覚を当然のものとして養ってきたのである。その感覚は都市化が進み，先端技術を誇る経済先進国となった今でも生きていると思う。土木技術の発達によって山は削られ川は埋め立てられ，自然の景観が損なわれた部分も大きいが，それでもまだ日本には手つかずの自然が残っている。急激な変化によってもたらされた自然と人工物の織りなす対照が人々の中に自然の姿を逆に強く意識させ，生活に即した環境保護が，草の根運動として定着しつつある。

コンゴでの自然保護活動への関わりを通じて，保護思想自体にも多様性が不可欠だという思いを強くするようになった。そしてこのような多様性を享受することができるのが，日本人が他の先進諸国とは違い自然の中で生きてきた証であり，その実体験とバランス感覚は，同じ人的貢献でも人を殺す可能性を秘めながらの国際貢献ではなく，真に共存の道を探る新たな活動を展開する可能性をもっている。

この2年の長期海外滞在中に，日本製品と名のつくものは，自動車・電化製品だけでなく食品，書籍から文化というべき部分まで輸出が進み，日本の風俗風習を身につけたまま外を出歩いても違和感がなくなったことは驚きである。日本人に対する詮索はまだかまびすしいが，逆に言えば注目を集めるチャンスであって，今こそ日本人の美徳としているバランス感覚が国際社会に貢献する絶好の機会なのである。

（おかやす・なおび/イギリス・ハウレッツ野生動物公園）